

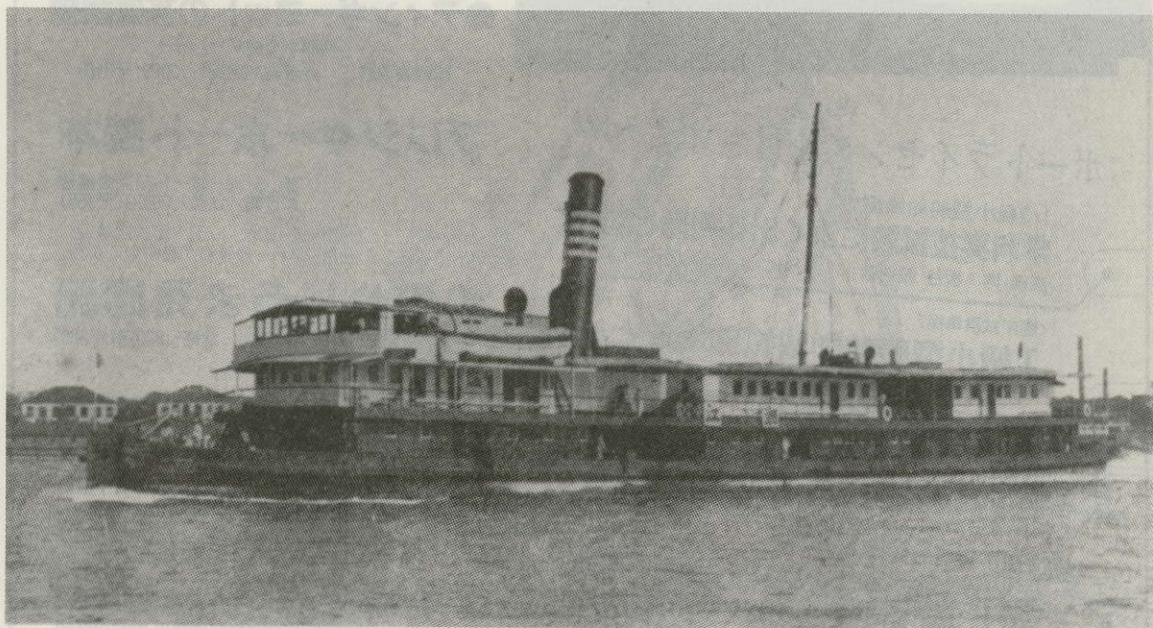
湘江丸

《主要目》貨客船、日清汽船所属、935総トン、

主機三連成汽機2基、2軸、速力10ノット、

旅客定員194人、1903年大阪鉄工所建造

ロイズの船名録では現役の明治の日本客船



中国でいまだ健在、88歳の超長寿船

戦前の日本の外航客船のすべてを収録したデータブック「日本の客船①一八六八～一九四五」(本年五月・海人社刊)の編集のために、ここ一年半ほど古い日本客船の船歴調べに忙殺された。

本業のサラリーマン稼業の昼休み時間を利用して、平河町の海事資料センターに何度も足をはこび、通信省の船名録や船会社・造船所の社史をひもといた。そのため、昼食を食べはぐれたこともしばしばだった。忙しい本業の合間を縫つて、二百数十隻の古い船の船歴を調べるのは苦しい作業だったが、調査の中で意外な発見があつたりして、充足感にひたることも多かった。

それはたとえば、とつくの昔に廃船になつたか、戦争で失われたと思っていた戦前・戦中の船が、最近まで外国で元気に稼働していた事実を発見したときである。

こうした例でよく知られているのは、「に志き丸」(一九三四年建造)である。この船は、一九七一(昭和四十六)年に別府航路から引退した後、香港とマカオを結ぶ定期客船「華山」として七年間稼働。その後、タイ、モルジブと転々とし、一九八二(昭和五十七)年に火災事故を起こして解体された。

戦前派の日本客船で近年まで稼働していた船は、このほかに、東亜海運の「濟南丸」（一九四三年建造）がある。この船は、大戦末期に長江（揚子江）下流で触雷し、沈没。戦後引き揚げられ、中国の沿岸航路貨客船「工農兵一三号」となって三十二年間も活躍し、「意志丸」と同じ年に解体された。

この二隻の解体で、戦前派の日本客船はすべて姿を消したものと思っていたが、今回調べているうちに、「ロイズ船名録」の上ではまだ現役の船が三隻ほど存在することが分かった。東亜海運の「興」クラスの「興亞丸」と「興泰丸」（ともに一九四〇年建造）、それに今回紹介する日清汽船の「湘江丸」で、いずれも中国の長江水域の河用貨客船である。

「湘江丸」は、『ロイズ船名録』では貨物船として記載されているが、現役であれば船齡八十八年の超老朽船であり、実際に動いているかどうかは未確認だ。

洞庭湖航路の超浅喫水客船として誕生

日清汽船という船会社は、明治の半ばに長江水域に進出した日本郵船、大阪商船、大東汽船、湖南汽船の四社が、競合する外国の船会社に対抗するため共同出資し、明治末年に設立した国策会社である。

「湘江丸」は、この日清汽船の前身会社湖南

汽船の洞庭湖航路用貨客船として、姉妹船の「沅江丸」とともに、一九〇三（明治三十六）年に大阪鉄工所（今の日立造船）で建造された。洞庭湖航路とは、長江中流の漢口（武漢）を出航し、洞庭湖畔の諸港に寄港。湘江を遡航し、長沙を経て、毛沢東の出身地として知られる湘潭に至るルートである。

洞庭湖は長江中流域の広大な湖であるが、長江から大量の土砂が流入し堆積するため、水深が非常に浅い。筆者は以前に洞庭湖を訪れたことがあるが、干上がつて露出した湖底が、はるかかなたまで続く大陸的な光景が脳裏に強く焼き付いている。「湘江丸」は、このようなきびしい水路事情のもとで定期運航に従事した客船であるから、喫水が非常に浅い。千トン近い船でありながら、喫水はわずか一・五メートル。それでも冬場の減水期には、しばしば休航を余儀なくされた。

軍艦に護られて定期航路をキープ

水深の浅さのほか、もうひとつ船会社を悩ませたのは、はげしい抗日活動による中国人の運航妨害である。そのため航路開設時の水路測量の際には、砲艦「愛宕」が派遣されたほどであった。これは蛇足だが、湖南人は昔から気性のはげしいことで有名で、革命家が輩出している。前述の毛沢東のほか、毛と対

立して失脚した彭德懷（毛と同じ湘潭の出身）と劉少奇もそうだし、最近では鄧小平の後継者と目されていながら失脚した胡耀邦も湖南人である。

さて日清汽船が設立されると、「湘江丸」は同社に移り、新設の漢口—常徳間に就航した。洞庭湖を経て沅江を遡るこの航路は、政府の命令航路であり、開業初航海の際には砲艦「隅田」が「湘江丸」を護衛した。だが、次第にはげしさを増す抗日活動の高まりとともに、定期航海をキープすることは実質的に困難となり、一九二七（昭和二）年以後は、休航せざるをえない状況となつた。

一九三三（昭和八）年に「湘江丸」は中国人船主に身売り。次いで二年後には上海の船主の手に渡り、「ヨン・キア」（漢字名不明）と名前が変わつた。就航航路は、日清汽船時代と同様に長江水域だつたと思われる。

第二次大戦後も健在で、新中国成立後は、中国遠洋運輸公司に所属し、前述のように貨物船として稼働しているようだ。

私のような戦前生まれの船好きは、年輪を重ねた「湘江丸」のような古い客船にいい知れぬなつかしさを覚える。トシのせいであろうか。